

日蓮大聖人御書全集

ししんごほんしょう

四信五品抄

新版
264
〜
271

ししんごほんしょう

四信五品抄

けんじ

ねん

がつ

にち

さい

ときじょうにん

建治 3 年 ('77) 4 月 10 日

56 歳

富木常忍

せいふひとゆい

おく

た

そうら

お

青鳧一結、送り給ひ候い了わんぬ。

こんらい

かくしゃいちどう

ごぞんち

い

ざいせ

めつごこと

今来の学者一同の御存知に云わく「在世・滅後異なりと

ほっけ

しゆぎよう

かなら

さんがく

ぐ

ひと

か

いえども、法華を修行するには必ず三学を具す。一つを欠

じよう

うんぬん

いても成ぜず」云々。

よ

としごろ

ぎ

そん

いちだいしろうぎよう

余また年来この義を存するところ、一代聖教はしばらく

お

ほけきよう

い

ぎ

けんもん

じよ

しょう

くこれを置く、法華經に入つてこの義を見聞するに、序・正

にだん

お

るつう

いちだん

まつぼう

みようきよう

の二段はしばらくこれを置く、流通の一段は末法の明鏡

えゆう

るつう

ふた

なり、もつとも依用となすべし。しかして、流通において二

あ いち

しやくもん なか ほつしとう ごほん

つ有り。一には、いわゆる迹門の中の法師等の五品なり。

に ほんもん なか ふんべつくだく はんぽん きよう お

二には、いわゆる本門の中の分別功德の半品より経を終わ

じゆういつぽんはん じゆういつぽんはん ごほん あ

るまで十一品半なり。この十一品半と五品と合わせて

じゆうろつぽんはん なか まつぼう い ほつけ しゆぎよう そうみよう

十六品半、この中に末法に入つて法華を修行する相貌

ふんみよう ことゆ ふげんぎよう ねはんぎようとう

分明なり。これになお事行かずんば、普賢経・涅槃経等を

ひ きた きゆうめい かく

引き来つてこれを糾明せんに、その隠れなきか。

なか ふんべつくだくほん ししん ごほん ほつけ しゆぎよう

その中に、分別功德品の四信と五品とは、法華を修行す

たいよう ざいせ めつご ききよう けいけい いちねんしんげ

るの大要、在世・滅後の亀鏡なり。荊溪云わく「一念信解と

すなわ

ほんもんりゆうぎよう

はじめ

うんぬん

なか

げんざい

は、即ちこれ本門立行の首なり」云々。その中に現在の

ししん

はじ

いちねんしんげ

めつご

ごほん

だいいち

しよずいき

四信の初めの一念信解と滅後の五品の第一の初随喜と、こ

にしよ

いちどう

ひやつかいせんによ

いちねんさんぜん

ほうきよう

じつぼうさんぜ

の二処は一同に百界千如・一念三千の宝篋、十方三世の

しよぶつ

い

もん

諸仏の出ずる門なり。

てんだい

みようらく

ふた

しようけん

にしよ

くらい

さだ

天台・妙楽の二りの聖賢、この二処の位を定むるに、

みつ

しゃくあ

そうじ

じっしん

てつりん

くらい

三つの釈有り。いわゆる、あるいは相似・十信・鉄輪の位、

かんぎようごほん

しよほん

くらい

みだんけんじ

あるいは観行五品の初品の位にして未断見思、あるいは

みようじそく

くらい

しかん

ふじよう

え

い

ぶついいし

名字即の位なり。止観にその不定を会して云わく「仏意知

がた

き

おもむ

いせつ

か

かいげ

なん

り難し。機に赴いて異説す。これを借りて開解せば、何ぞ

わらず

ねんこ

あらそ

うんぬんとう

労わしく苦ろに諍わん」云々等。

よ

こころ

い

みつ

しやく

うち

みようじそく

きようもん

かな

予が意に云わく、三つの釈の中、名字即は経文に叶う

めつこ

ごほん

はじ

いつぽん

と

い

きし

か。滅後の五品の初めの一品を説いて云わく「しかも毀眚せ

ずいき

こころ

お

もん

そうじ

ごほん

わた

ずして、随喜の心を起こす」。もしこの文、相似・五品に渡

きし

ことば

びん

らば、「しかも毀眚せずして」の言は便ならざるか。なか

じゆりようほん

しっしん

ふしっしん

とう

みな

みようじそく

んずく寿量品の「失心、不失心」等は、皆、名字即なり。

ねはんぎよう

しん

しん

ないしきれん

涅槃経に「もしは信ずるも、もしは信ぜざるも乃至熙連」

かんが

いちねんしんげ

しじ

うち

しん

とあり。これを勘えよ。また「一念信解」の四字の中の「信」

いちじ

ししん

はじ

こ

げ

いちじ

のち

うば

の一字は四信の初めに居し、「解」の一字は後に奪わるるが

ゆえ 故なり。もししからば、無解有信は四信の初位に当たる。経

だいにしん と い りやくげごんしゅ うんぬん き く い

に第二信を説いて云わく「略解言趣」云々。記の九に云わ

しよしん のぞ はじ げな ゆえ

く「ただ初信のみを除く。初めは解無きが故に」。したがつ

つぎしも ずいきほん いた かみ しまずいき かさ

て、次下の随喜品に至つて、上の初随喜を重ねてこれを

ふんみよう ごじゆうにん みなてんでん おと だいごじゆうにん いた

分明にす。五十人これ皆展転して劣るなり。第五十人に至

ふた しゃくあ いち い だいごじゆうにん しまずいき

つて二つの釈有り。一には、謂わく「第五十人は初随喜の

うち に い だいごじゆうにん しまずいき ほか

内なり」。二には、謂わく「第五十人は初随喜の外なり」と

みようじそく きよう じつ くらい ひく

いうは名字即なり。「教いよいよ実なれば位いよいよ下し」

しゃく しゃくろ し みさんぎよう えんぎよう き おさ

という釈は、この意なり。四味三教よりも円教は機を撰

にぜん えんぎよう

ほけきよう

き

おさ

しやくもん

ほんもん

め、爾前の円教よりも法華経は機を摂め、迹門よりも本門

き っ

きよう みじつ い み げ

きよう

じつ

は機を尽くすなり。「教弥実位弥下（教いよいよ実なれば

くらい

ひく

ろくじ

こころ

とど

あん

位いよいよ下し」の六字、心を留めて案ずべし。

と

まつぼう

い

しよしん

ぎようじゃ

かなら

えん

さんがく

ぐ

問う。末法に入つて初心の行者、必ず円の三学を具す

いな

るや不や。

こた

い

ぎだいじ

ゆえ

きようもん

かんが

い

答えて曰わく、この義大事たるが故に、経文を勘え出だ

きへん

そうふ

ごほん

しよ

に

さんぽん

ほとけ

して貴辺に送付す。いわゆる五品の初・二・三品には、仏

まさ

かい

じよう

にほう

せいし

いつこう

え

いちぶん

かぎ

正しく戒・定の二法を制止して、一向に慧の一分に限る。

え

た

しん

え

か

しん

いちじ

せん

慧また堪えざれば、信をもつて慧に代え、信の一字を詮と

なす。不信は一闡提・謗法の因、信は慧の因、名字即の位

ふしん いっせんだい ほうぼう いん しん え いん みようじそく くらい

てんだい

そうじ やく

わす

なり。天台云わく「もし相似の益ならば、生を隔つるも忘

みようじ

かんぎよう

やく

しょう

へだ

すなわ

わす

れず。名字・観行の益ならば、生を隔つれば即ち忘れ、

わす

あ

わす

もの

ちしき

あ

あるいは忘れざるも有り。忘るる者も、もし知識に値わば

しゆくぜんかえ

しょう

あくゆう

あ

すなわ

ほんしん

うしな

宿善還つて生ず、もし悪友に値わば則ち本心を失う」

うんぬん

おそ

ちゆうこ

てんだいしゆう

じかく

ちしyou

りようだいし

云々。恐らくは、中古の天台宗の慈覚・智証の両大師も、

てんだい

でんぎよう

ぜんちしき

いはい

こころ

むい

ふくうとう

あくゆう

天台・伝教の善知識に違背して、心は無畏・不空等の悪友

うつ

まつだい

かくしや

えしん

おうじようようしゆう

じよ

おうわく

に遷れり。末代の学者、恵心の往生要集の序に狂惑せら

ほつけ

ほんしん

うしな

みだ

ごんもん

い

たいだいしゆしyou

れて、法華の本心を失い、弥陀の権門に入る。退大取小の

もの かこ

おも

みらいむしゅこう

ふ

者なり。過去をもつてこれを惟うに、未来無数劫を経るも、

さんあくどう しよ

あくゆう

あ

すなわ

ほんしん

うしな

三悪道に処せん。「もし悪友に値わば則ち本心を失う」と

は、これなり。

と

しやう

問うて曰わく、その証いかん。

こた

い

しかん

だいろうく

い

ぜんきやう

くらい

たか

答えて曰わく、止観の第六に云わく「前教にその位を高

ゆえん

ほうべん

せつ

えんぎやう

くらいひく

くする所以は、方便の説なればなり。円教の位下きは、

しんじつ

せつ

ぐけつ

い

ぜんきやう

しも

真実の説なればなり。弘決に云わく『前教』より下は、

まさ

ごんじつ

はん

きやう

じつ

くらい

ひく

正しく権実を判ず。教いよいよ実なれば位いよいよ下く、

きやう

ごん

くらい

たか

ゆえ

き

く

教いよいよ権なれば位いよいよ高きが故に」。また記の九

い くら い はん かんきよう ふか じつくらい
に云わく「位を判ずとは、観境いよいよ深く実位いよいよ

ひく あらわ うんぬん たしゅう お てんだいいちもん

よ下きを顕す」云々。他宗はしばらくこれを置く、天台一門

がくしやとう なん じつくらい ひく しやく さしお えしん

の学者等、何ぞ「実位いよいよ下し」の釈を閣いて恵心

そうず ふで もち い ち くら かく しょう お

僧都の筆を用いるや。畏・智・空と覚・証とのことは、追つ

なら だいじ だいじ いちえんぶだいいち だいじ

てこれを習え。大事なり、大事なり、一閻浮提第一の大事な

こころ あ ひと き のち われ うと

り。心有らん人は聞いて後に我を外め。

と い まつだいしよしん ぎようじや なにもの せいし

問うて云わく、末代初心の行者に、何物をか制止するや。

こた せい だん かいとう ごど せいし いっこう

答えて曰わく、檀・戒等の五度を制止して一向に

なんみようほうれんげきよう とな いちねんしんげ しょういき けぶん

南無妙法蓮華經と称えしむるを、一念信解・初随喜の気分と

なすなり。これ則ちこの経の本意なり。

うたが

い

ぎ

けんもん

こころ

おどろ

疑って云わく、この義いまだ見聞せず。心を驚かし、

みみ

まよ

あき

しょうもん

ひ

こ

ねんご

耳を迷わす。明らかに証文を引いて、請う、苦ろにこれ

しめ

を示せ。

こた

い

きよう

い

わ

とうじ

た

答えて曰わく、経に云わく「我がためにまた塔寺を起て、

そうぼう

つく

しじ

しゆそう

くよう

もち

および僧坊を作り、四事をもつて衆僧を供養することを須

きようもん

あき

しよしん

ぎようじや

だん

かいとう

ごど

いず」。この经文、明らかに初心の行者に檀・戒等の五度

せいし

もん

を制止する文なり。

うたが

い

なんじ

ひ

きようもん

じとう

疑って云わく、汝が引くところの经文は、ただ寺塔と

しゅそう

せいし

もろもろ

かいとう

およ

衆僧とばかりを制止して、いまだ諸の戒等に及ばざるか。

こた

い

はじ

あ

のち

りやく

答えて曰わく、初めを挙げて後を略す。

と

い

なに

し

問うて曰わく、何をもつてこれを知らん。

こた

い

つぎしも

だいしほん

きようもん

い

答えて曰わく、次下の第四品の経文に云わく「いわんや、

ひとあ

よ

きよう

たも

か

ふせ

じかいとう

また人有つて、能くこの経を持ち、兼ねて布施・持戒等を

ぎよう

うんぬん

きようもんふんみよう

しよ

に

さんぽん

ひと

だん

行ぜんをや」云々。経文分明に初・二・三品の人には檀・

かいとう

ごど

せいし

だいしほん

いた

はじ

ゆる

のち

戒等の五度を制止し、第四品に至つて始めてこれを許す。後

ゆる

し

はじ

せい

に許すをもつて知んぬ、初めは制すること。

と

い

きようもん

いちおう

あい

しよしやくあ

問うて曰わく、経文、一往、相似たり。はたまた疏釈有

りや。

こた

い

なんじ

たず

しやく

がつし

しえ

答えて曰わく、汝が尋ぬるところの釈とは、月氏の四依

ろん

かんど

にほん

にんし

しよ

ほん

す

まつ

の論か、はたまた漢土・日本の人師の書か。本を捨てて末を

たず

たい

はな

かげ

もと

みなもと

わす

なが

たつと

尋ね、体を離れて影を求め、源を忘れて流れを貴ぶ。

ふんみよう

きようもん

さしお

ろんしやく

こ

たず

ほんきよう

そうい

分明なる経文を闇いて、論釈を請い尋ぬ。本経に相違

まつしやくあ

ほんきよう

す

まつしやく

つ

する末釈有らば、本経を捨てて末釈に付くべきか。

この

したが

しめ

もんぐ

しかりといえども、好みに随つてこれを示さん。文句の

く

い

しよしん

えん

ふんどう

しようごう

しめ

さまた

九に云わく「初心は縁に紛動せられて正業を修するを妨

おそ

ただ

もつぱ

きよう

たも

すなわ

げんことを畏る。直ちに専らこの経を持つは、即ち

じようくよう

じ はい

り そん

やく

ぐた

上供養なり。事を廃して理を存するは、益するところ弘多な

しゃく

えん

い

ごど

しよしん

ものか

り。この釈に「縁」と云うは、五度なり。初心の者兼ね

ごど

ぎよう

しようごう

しん

さまた

たと

て五度を行ずれば、正業の信を妨ぐるなり。譬えば、

しようせん

たから

つ

うみ

わた

たから

ぼつ

小船に財を積んで海を渡るに、財とともに没するがごと

ただ

もつぱ

きよう

たも

い

いつきよう

わた

し。「直ちに専らこの経を持つ」と云うは、一経に亘る

もつぱ

だいもく

たも

よもん

まじ

いつきよう

にあらず。専ら題目を持つて余文を雑えず。なお一経の

どくじゆ

ゆる

ごど

じ

はい

読誦をも許さず。いかにいわんや五度をや。「事を廃して理

そん

い

かいとう

じ

す

だいもく

り

もつぱ

を存す」と云うは、戒等の事を捨てて、題目の理を専らに

うんぬん

やく

ぐた

しよしん

もの

しよぎよう

す云々。「益するところ弘多なり」とは、初心の者、諸行と

だにもく　なら　ぎよう　やぐ　まった　うしな　うんぬん
題目とを並び行ずれば、益するところ全く失う云々。

もんぐ　い　と　きよう　たも　すなわ
文句に云わく「問う。もししからば、経を持つは即ち

だいいちぎかい　なに　ゆえ　よ　かい　たも　もの　い
これ第一義戒なり。何が故ぞまた能く戒を持つ者と云うや。

こた　しよほん　あ　まさ　のち　なん　な
答う。これは初品を明かす。応に後をもつて難を作すべか

とううんぬん　とうせい　かくしや　しやく　み　まっだい　ぐにん
らず」等云々。当世の学者、この釈を見ずして、末代の愚人

なんがく　てんだい　にしよう　どう　あやま　なか　あやま
をもつて南岳・天台の二聖に同ず。誤りの中の誤りなり。

みようらくかさ　あ　い　と
妙楽重ねてこれを明かして云わく『問う。もししから

じ　とう　しきしん　こつ　もち　まさ
ば』とは、もし事の塔および色身の骨を須いずんば、また応

じ　かい　たも　もち　ないしじ　そう　くよう
に事の戒を持つことを須いず、乃至事の僧を供養すること

もち

を須いざるべしやとなり」等云々。伝教大師云わく

とううんぬん

でんぎようだいし

にひやくごじっかい

す お

きようだいしいちにん

「二百五十戒たちまちに捨て畢わんぬ」。ただ教大師一人

かぎ

がんじん

でし

によほう

どうちゆう

のみに限るにあらず、鑑真の弟子の如宝・道忠ならびに

しちだいじとういちどう

す お

きようだいし

みらい

いまし

七大寺等一同に捨て了わんぬ。また、教大師、未来を誡め

い まつぼう

なか

じかい

ものあ

けい

いち

て云わく「末法の中に持戒の者有らば、これ怪異なり。市に

とらあ

たれ しん

うんぬん

虎有るがごとし。これ誰か信すべき」云々。

と なんじ

なん

いちねんさんぜん

かんもん

かんじん

だいもく

問う。汝、何ぞ、一念三千の観門を勧進せず、ただ題目

とな

ばかりを唱えしむるや。

こた

い

にほん

にじ

ろくじゅうろつこく

おさ

つ

答えて曰わく、日本の二字に六十六国を撰め尽くして、

にん ちく ざいひと

のこ

がつし

りようじ

しちじつかこくな

人・畜・財一つも残らず。月氏の両字にあに七十箇国無か

みようらくい

りやく

きようだい

あ

げん

いちぶ

らんや。妙楽云わく「略して経題を挙ぐるに、玄に一部

おさ

い

りやく

かい

によ

あ

を収む」。また云わく「略して界・如を挙ぐるに、つぶさ

さんぜん

おさ

もんじゆしりぼさつ

あなんそんじや

さんえはちねん

あいだ

に三千を撰む」。文殊師利菩薩・阿難尊者、三会八年の間の

ぶつこ

あ

みようほうれんげきよう

だい

つぎしも

りようげ

い

仏語、これを挙げて妙法蓮華経と題し、次下に領解して云

われき

うんぬん

わく「かくのごときを我聞きき」云々。

と

ぎ し

ひと

なんみようほうれんげきよう

とな

問う。その義を知らざる人、ただ南無妙法蓮華経とのみ唱

ぎ げ

くどく

そな

いな

うるに、義を解する功德を具うや不や。

こた

しように

にゆう

ふく

あじ

し

じねん

答う。小児、乳を含むに、その味を知らざれども自然に

みやく ぎば みようらく たれ わきま ふく みずこころ
身を益す。耆婆が妙薬、誰か弁えてこれを服せん。水心

な ひ け ひもの や さと あ
無けれども火を消す。火物を焼くに、あに覚り有らんや。

りゆうじゆ てんだいみな こころ かさ しめ
竜樹・天台皆この意なり。重ねて示すべし。

と なに ゆえ だいもく ばんぼう ふく
問う。何が故ぞ題目に万法を含むや。

こた しょうあんい じよおう きよう げんい の
答う。章安云わく「けだし、序王とは経の玄意を叙ぶ。

きよう げんい もん こころ の もん こころ しゃくほん す
経の玄意は文の心を述ぶ。文の心は迹本に過ぎたるは

なし。妙楽云わく「法華の文の心を出だして諸教の所以

べん うんぬん じよくすいこころな つき え おの す
を弁ず」云々。濁水心無けれども、月を得て自ずから清め

そうもくあめ う さと あ はなさ
り。草木雨を得るに、あに覚り有つて花かんや。

みようほうれんげきよう

ごじ

きようもん

ぎ

妙法蓮華經の五字は、經文にあらず、その義にあらず、

いちぶ こころ

しよしん

ぎようじゃ

こころ

し

ただ一部の意なるのみ。初心の行者、その心を知らざれ

ぎよう

じねん

こころ

あ

ども、しかもこれを行ずるに、自然に意に当たるなり。

と

なんじ

でし

いちぶん

げな

ひとくち

問う。汝が弟子、一分の解無くして、ただ一口

なんみようほうれんげきよう

とな

くらい

南無妙法蓮華經と称うるものは、その位いかん。

こた

ひと

しみさんぎよう

ごくう

にぜん

答う。この人は、ただ四味三教の極位ならびに爾前の

えんにん ちようか

しんごんとう

しよしゆう

円人に超過するのみにあらず、はたまた真言等の諸宗の

がんそ い ごん おん ぞう せん ま どうとう しようしゆつ

ひやくせんまんおく

元祖、畏・儼・恩・蔵・宣・摩・導等に勝出すること百千万億

ばい

倍なり。

こ こくちゅう しよにん わ まつていとう かる

請う、国中の諸人、我が末弟等を軽んずることなかれ。

すす かこ たず はちじゅうまんおくこうくよう だいぼさつ

進んで過去を尋ねれば、八十万億劫供養せし大菩薩なり。

きれんいちごう もの しりぞ みらい ろん

あに熙連一恒の者にあらずや。退いて未来を論ずれば、

はちじゅうねん ふせ ちようか ごじゅう くどく そな てんし

八十年の布施に超過して五十の功德を備うべし。天子の

むつき まと だいりゅう はじ しょう べつじよ

襁褓に纏われ、大竜の始めて生ずるがごとし。蔑如する

べつじよ

ことなかれ、蔑如することなかれ。

みようらくい のうらん もの こうべしちぶん わ くよう

妙楽云わく「もし悩乱する者は頭七分に破れ、供養す

もの ふくじゅうごう す う だえんおう びんずるそんじや

ることあらん者は福十号に過ぐ。優陀延王は賓豆盧尊者

べつじよ しちねん うち み そうしつ そうしゅう にちれん るざい

を蔑如して七年の内に身を喪失し、相州は日蓮を流罪して

ひやくにち　うち　ひようらん　あ　きよう　い

百日の内に兵乱に遇えり。経に云わく「もしまたこの

きようてん　じゅじ　もの　み　かあく　い　じつ

經典を受持せん者を見て、その過惡を出ださば、もしは実

にもあれ、もしは不実にもあれ、この人は現世に白癩の病

え　ないしもろもろ　あくじゅうびよう　いと　げんせ　びやくらい　やまい

を得ん乃至諸の惡重病あるべし。また云わく「当に

せぜ　まなこな　とううんぬん　みようしん　えんち　げん　びやくらい

世々に眼無かるべし」等云々。明心と円智とは現に白癩

え　どうあみ　むげん　もの　な　こくちゆう　えきびよう　こうべしちぶん

を得、道阿弥は無眼の者と成りぬ。国中の疫病は「頭七分

わ　ばち　とく　おも　わ　もんにと　ふく

に破る」なり。罰をもつて徳を惟うに、我が門人等は「福

じゅうじう　す　うたが

十号に過ぐ」疑いなきものなり。

そ　にんのうさんじゅうだいきんめい　ぎよう　はじ　ぶつぼうわた

夫れ、人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りしより

このかた かんむ ぎょう いた にじゅうだいにひやくよねん あいだ ろくしゅう

以来、桓武の御宇に至るまで、二十代二百余年の間、六宗

あ ぶつぼう さだ えんりやくねんちゅう

有りといえども、仏法いまだ定まらず。ここに、延暦年中

ひと しょうにんあ くに しゅつげん でんぎよう

に一りの聖人有つて、この国に出現せり。いわゆる伝教

だいし ひと さき ぐつう ろくしゅう きようめい

大師これなり。この人、先より弘通せる六宗を糾明して

しちじ でし えいざん た ほんじ しよじ

七寺を弟子となし、ついに叡山を建てて本寺となし、諸寺を

と まつじ にほん ぶつぼう いちもん おうぼう ふた

取つて末寺となす。日本の仏法ただ一門のみなり。王法も二

ほうさだ くにす く ろん みなもと

つにあらず。法定まり国清めり。その功を論ぜば、源、「已

こんとう もん い

今当」の文より出でたり。

のち こうぼう じかく ちしよう さんだいし じ かんど よ

その後、弘法・慈覚・智証の三大師、事を漢土に寄せて

だいにち さんぶ ほけきよう すぐ

い

きようだいし

「大日の三部は法華經に勝る」と謂い、あまつさえ教大師

けず

しんこんしゆう

しゆう

いちじ

そ

はつしゆう

の削るところの真言宗の宗の一字、これを副えて八宗と

うんぬん

さんにんいちどう

ちよくせん

もう

くだ

にほん

ぐつう

てら

云々。三人一同に勅宣を申し下して日本に弘通し、寺ごと

ほけきよう

ぎ

やぶ

いこんとう

もん

やぶ

に法華經の義を破る。これひとえに、「已今当」の文を破ら

しやか

たほう

じつぼう

しよぶつ

だいおんてき

な

んとして、釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵と成りぬ。し

のち

ぶつぼうようや

すた

おうぼうしだい

おとろ

てんしやうだいじん

かる後、仏法漸く廃れ、王法次第に衰え、天照太神・

しやうはちまんとう

くじゆう

しゆごしん

ちから

うしな

ぼんたい

してん

くに

正八幡等の久住の守護神は力を失い、梵帝・四天は国を

さ

ぼうこく

な

こころあ

ひと

たれ

いた

去つて、すでに亡国と成らんとす。情有らん人、誰か傷み

なげ

せん

さんだいし

じゃほう

おこ

ところ

嗟かざらんや。詮ずるところ、三大師の邪法の興る所は、

とうじ えいざん そうじいん おんじょうじ きんじ
いわゆる東寺と叡山の総持院と園城寺との三所なり。禁止

こくど めつぼう しゅじょう あくどう うたが
せずんば、国土の滅亡と衆生の悪道と疑いなきものか。予

むね かんが こくしゅ しめ じような
ほぼこの旨を勘え国主に示すといえども、あえて叙用無し。

かな かな
悲しむべし、悲しむべし。